

お酒

菅田 忠志

「一日過ぎたら治る治るの……」

なんとおおそつばな親だろつと思つた。腰のまわりに出てきた激しい湿疹。直径4、5センチもある大きなもので、その夜はひどいかゆみと発熱の洗礼を受け、のたうちまわることとなつた。おかげでこの年は初出勤の日から休んでしまつた。

私が二十歳少し前の正月4日から5日の夕食時だつた。

「そろそろお前も飲むか」と、おやじが正月用の杯を差し出してくれた。

普通であれば、正月なら元旦のおとそをいただくことになるのだから、その頃は、正月連休にはいつも冬山合宿に出かけていたため、元旦といえども家にはいなかった。

今思えば罪なことだが、毎年家族そろつて新年を

- 1 -

迎えるのは4、5日遅れとなつた。

正月といつこともあつて、おやじの席の横には、我が家にしてはめずらしく、「特級の一升びんが誇らしげに、まるで家族の一員にでもなつたように、すました顔をして出番を待っていた。

口当たりも良かったのだから。さだかなところは覚えていないが、それまでにも、ないしよで飲んだことのある量にくらべれば多かつたらしい。身体がビククリしたのが、激しいジンマシンが腰のまわりに一斉に出て拒絶反応を起してしまつた。

今思い出してもかゆくなりそうだが、不思議とそんな「儀式」は一度で済み、それ以降は酒を飲む機会も増え、まわりの者から「親ゆすりやなあ」と言われながら、酒の量もすすんでいった。

ときどき、人から「昨夜は酔っぱらつてしまつてどうやって家に帰つたかわからない」などといつことを聞くにつれ、そんなことは絶対にあるはずがない。世のなか大げさにいう人もいるもんだと思つた。

- 2 -

いつの頃だったか忘れたが、よほど楽しい宴会だったのだろう。すつかりリラックスした酒の席となり酒量も進んだ。その夜は、2次会、3次会と飲み歩き、いざ帰ろうと歓楽街のスナックのエレベーターに乗ったところまでの記憶はあるが、その後の記憶がぶつつりと消えていた。

翌日、自毛の寢床で目がさめてびっくりした。そんなことなどあるはずがない自分がそこにいた。大げさではなかったのだ。

うーん こんな呑みかたはよくないなあ。

それから、「適量」を自覚し、百薬の長を楽しんでいる。何度も味わったあの二日酔いの不快さをももう卒業したことだし。。。